Institute of Social Safety Science



# 秋田県鹿角市花輪地区にみる伝統的な防災対策に関する研究

## A Study on Usual Traditional Disaster Prevention Measures in Hanawa District of Kazuno City, Akita Prefecture

○渡辺 千明, 鈴木 有
Chiaki WATANABE and Tamotsu SUZUKI

秋田県立大学木材高度加工研究所
Institute of Wood Technology, Akita Prefectural University

The object of this study is to clarify the usual traditional disaster prevention measures in Hanawa district of Kazuno city, North of Akita prefecture and to apply these various wisdoms of ancestors, which are now existing in the regional society of this district, to present disaster prevention measures The relevant data were collected by the fieldworks for the two wooden traditional houses with wooden arcades 'Komise' in this district and also by the survey of references on the history of Kazuno

***Key Words:*** *regional society, disaster prevention capability, wisdom of ancestors*

## 1 はじめに

阪神・淡路大震災後,地域の防災力の向上や,地域特性を考慮した防災対策の必要性が強調されている しかし,そのような指摘は決して新しい問題ではないと筆者らは考えている 地震や降積雪・降雨といった外力が当該地域社会の防災力を上回ったとき,災害は顕著となる それ故に,古来から人々は既往の災害経験を生かして防災力を向上させてきたと考えられる 地域の防災力は災害文化と言われるものに支えられ,それには被害抑止を目的とする構築物ばかりでなく,被害軽減を図る社会の仕組みや生活上の工夫も含まれる

本研究は,その地域固有の伝統的な木造住宅の構造や生活文化・地域社会の仕組みから,地域の防災対策に関わる先人の智恵を掘り起こし,現代社会に再構築する方策の提示を最終目的としている

本論では,秋田県北東部に位置する鹿角市花輪地区をフィールドに,1)町家の構造や伝統的な生活習慣にみられる防災対策の事例を集約し,2)その中から優れていると考えられる点を分析し,3)現代の防災対策に活かすべき教訓をまとめる

用いた資料は,2000 年 8 月と 10 月の 2 回にわたって行った聞取調査と建物構造調査,及び市史[1)]等の文献調査の結果である 調査は,この地方の伝統的なコミセ(木造アーケード)をもつ現況建物で,花輪地区で最後の 2 軒となった商家を保存するための調査の一環として行われた[14)]

## 2 鹿角市花輪地区の特徴

### (1)鹿角の歴史

鹿角市は秋田県の北東端の青森・岩手両県の県境に位置する,人口約 4 万 1 千人の市である[2)] 南北に細長い盆地の中にあるこの地方は,古代から豊かな土地として知られており,「錦木」や「けふの細布」など陸奥国の歌枕の地となっている 慶長年間(1596～1614 年)の初めに金山が発見され,活況を帯びることにより,花輪の町並みが形成されたと言われている 藩政期には広大な南部領の在町*の一つとして城下町に代わる機能を果たし,交通の要路としても栄えてきた また,約 1,200 年の歴史を有する尾去沢鉱山を後背地に,鉱工業の活況により戦前まで発展した地域でもある

### (2)鹿角の気候

この地域の標高は高いが,県南部の盆地に比べると最大積雪深は平均で 1m以下と積雪量は少ない しかしながら,積雪期間は約 5 ヶ月と長い

東北地方の太平洋岸に 6～8 月に吹く冷たく湿った東風あるいは北東風は「ヤマセ(山背)」とよばれ,それによって夏は冷涼な気候となる しかし,この風の影響が長く続くと低温や日照不足・霧雨などを引き起こし,度々農作物に被害をもたらしてきた

### (3)鹿角の災害

鹿角市の江戸期から明治時代(1644～1909 年)までの 265 年間に被害をもたらした主な災害の発生回数と頻度を図 1 に示す 地震災害は全期間でわずかに 5 回しか発生していないが,凶作と火災は 4 年に 1 回,洪水は7年に1回と頻繁に発生しており,この地域住民にとってこれらの災害は対策を怠れないものであったと推測できる 特に明治 38 年 5 月 27 日に発生した大火災は,中心市街地である花輪地区に広がって 134 棟を焼失し,今なお「明治 38 年の大火」として語り継がれている** また,積雪期間の長い当地にとっては,雪対策は生活上欠かせないものであったと考えられる 以下,凶作・火災・洪水および雪対策に関して,事例の分析を行う

なお図 1 の凶作には,不作・凶作・大凶作・飢饉の数を含むが,霜害・虫害・旱魃などの災害や冷害は含まれていない



NII-Electronic Library Service

Institute of Social Safety Science

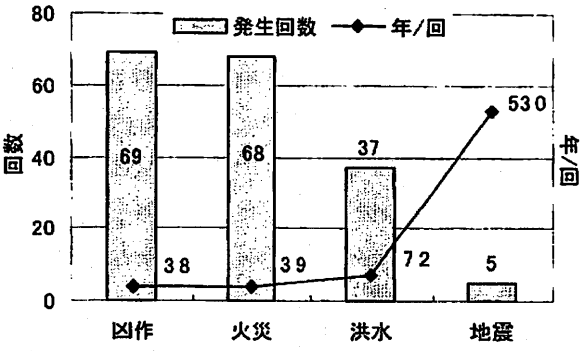


図 1　江戸～明治時代の災害発生回数と頻度
（文献 3)より作成）

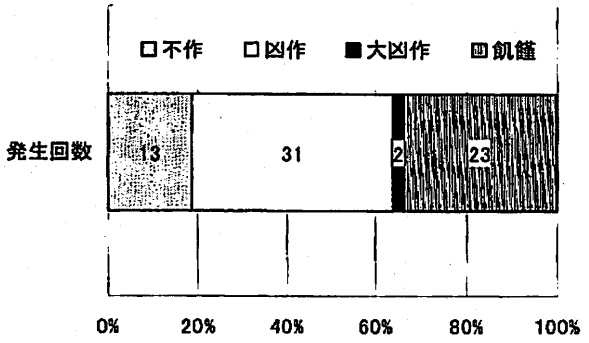


図 2　江戸～明治時代の凶作の発生回数
（文献 3)より作成）

表 1　大正～昭和初期の凶作段階とその対策
（文献 5)より作成）

| 凶作段階 | 凶作対策 |
|---|---|
| 第1期 凶作1年目<br>食い延ばしを図る | ・郷倉の米を放出<br>・政府米の払い下げ<br>・田螺・蝗を食す |
| 第 2 期 凶作 2 年目<br>草木の葉・根を食する | ・乾し飯・寒晒し粉の利用<br>・蟹・沢蟹・蜂を食す |
| 第 3 期:凶作3年目以降<br>食べられる物は何でも食する | ・木の葉や木皮の粉末の利用<br>・牛・馬・犬・猫・蛇を食す |

## 3 花輪地区の伝統的な防災対策

### (1)凶作対策

**①地域共有財産による備蓄と共同管理**

花輪地区を構成する一つの町である六日町では,豊かな豪商が自家の蓄えを町内救済のために供出してきたが,10 年以上も続く江戸時代後期の凶作では,自家の財産も危うくなったため,所有する田畑を町内に寄付している 町はこれを基に米の備蓄や植林を行い,地主を中心とする財産管理機関を作って協同で管理・運営し***,災害対応を行うようになった また花輪周辺の寺坂や柴平といった村では協同の田を所有し,共同作業で稲作を行っており,郷倉に保存するだけでなく,米の貸付と年賦による返済も行っていた 明治 38 年の大火後は,復旧対策にこの共有財産を使用して町内全戸に籾 3 駄,近隣町内の被災した家に籾 1 駄を,また復旧材として町内林から各戸に杉材 8～10 本を給付している

**②気候風土に即した栽培植物と自給自足型の食生活基盤**

図 2 は図1の凶作の内訳を示している 市川によれば[4],「不作」は米の収穫量が平年量の 1/4 減少すること,「凶作」「大凶作」はそれぞれ 1/2,3/4 減少することとされている 不作よりも収穫量が半減する凶作の方が頻繁に起こっていることから,厳しい生活状況であったことが推察される

ヤマセが吹く南部地方では冷害に強い稗や,旱魃に強い粟,麦や豆・そばが五穀として栽培されてきた 特にこの地域は,元来,粟・そば・大豆等の雑穀や周辺の山の植物を利用した自給自足型の食生活であったため,救荒食もそうした生活経験の中から生まれている[5] 明治・大正時代から昭和 10 年まで,東北地方では凶作が続き,農村の青田売りや身売りが社会問題にもなった 文献 5)は秋田県各地の古老から食生活を関して聞き取り調査を行ったものであるが,当時の農村では凶作の程度ごとに対応の工夫がなされていた(表1)

ここであげた 2 つの凶作対策は,米を税として納入していた時代には日本各地で行われていた生活の工夫であったと考えられる しかしながら,年一度しか収穫期がなく,また長い冬を乗り切る必要のあった鹿角では,地域住民が協力して備えるほか,利用可能な有用資源とその効果的な利用方法に関して,日常的な智恵の集積が行われていたと思われる

### (2)火災対策

**①塗込め大壁とウダツによる建物の防火**

主屋北側の壁は,2 軒の町家ともに漆喰塗籠大壁仕上げとなっていた(写真 1) 聞取調査では,これは強い北風を防ぐためで,寒さに備えたものであるとのことであったが,資料にはウダツを上げた町家の写真が掲載されていること[6]や,町家の通りニワが避難路になったとの記載[7]もあることから,防寒対策のみにとどまらず,火災対策でもあったと考えられる また 1 軒の町家にはウダツの一部が残存していた(写真 2)

火災対策として町家に施されたウダツや大壁塗籠の土壁・漆喰壁の使用は日本各地でみることができるが,これらは湿気や雪に弱いこともあって雪国秋田の他地域では例が少なく,鹿角の特色の一つと言える これは,かつてこの地方が雪の少ない太平洋側を主圏域とする南部藩領文化圏であった影響によるものと推測される

**②伝承と防火祈祷による生活習慣としての出火防止策**

建物構造による備えのほか,「(その場を離れて消火を見届けられなくなることが多いので)午後には火を焚くな」,「風呂の水は朝まで抜くな」といった生活習慣上の対策も伝えられている この他,年に一度「火伏(防)せ」という防火祈祷が現在も各町内で行われている(写真 3) 別当(神主)を先頭に町内役員が塩と水をまいて町の各要所を清め,その後,「火の用心」のお札が神社から各家に配布され,火災に対する注意を喚起している

火災に対する伝承や防火祈祷は全国各地に残っているが,花輪では,六日町のほか新町や舟場でも現在も町内の祭礼に伴って火伏せの行事が行われている 花輪では函館大火の教訓から町内寄付によって昭和 9 年に自動車ポンプを購入している 明治の大火を語り継ぐことによって,火災対策への関心を高め,防火の重要性を伝承し続けていると思われる



NII-Electronic Library Service

Institute of Social Safety Science

写真 1 主屋北側の漆喰塗籠大壁仕上げの壁

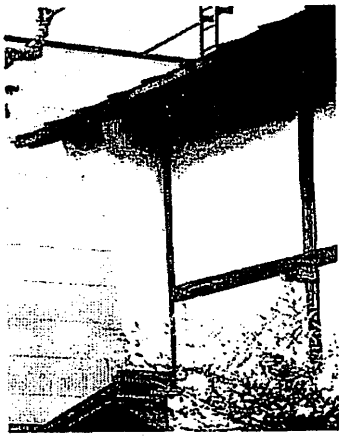

写真 2 ウダツの一部を残した商家の袖壁
鹿角ではウダツはドベイとよばれていた [8]

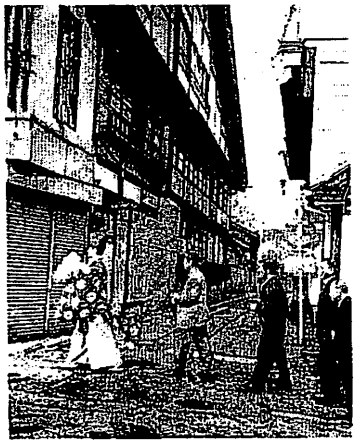

写真 3 町内の神社の宵宮の日に行われる防火祈祷

(3)洪水対策

①地域共有財産による備蓄と共同管理

藩政時代には増水して田畑を荒廃させることを「川欠(かわかけ)」とよんでいた 花輪近隣の大欠村では,洪水による用水路被害が頻繁に発生(おこ)するため,それを防ぐための工事用木材を供出する郷林を共同管理していた [9]

(4)雪対策

①積雪時の交通路の確保

かつて花輪地区には,街道沿いの両側に南北長さ約1 km にわたり,コミセが連続する商店街が存在した [10] 写真 4 は現存するコミセの様子である 文献によれば,「雪の高きこと屋根の如く,屋根は道の如し」といわれ,積雪時にはコミセの中からは道を通る馬はコミセの屋根の上を歩いているように見えたという [11] この木造アーケードは積雪時の町内唯一の交通路で,冬季生活の場を確保する役割を担っていた

②無積雪の工夫と私有地の提供

コミセは私有地であったため,その幅は各家によって異なり,広いところでは 1 間半,狭いところで 5 尺位であったらしい 調査した 1 軒のコミセの柱間隔は 1 間であり,また列柱には摺り上げ蔀戸が入っていた溝が残存し,青森県弘前市等と同様 [12],降積雪がコミセ内に入り込むのを防ぐ工夫があったことを確認した 図 3 は江戸時代の弘前市のコミセをもつ商店の様子を描いたものである [13] コミセの柱間には,上は障子,下は板戸の2枚の蔀戸が入っており,花輪のコミセも同じ構造であったと考えられる

③冬季も利用可能な交流の場

コミセは通路としての機能ばかりでなく,板を出してその上に商品を並べる商店の一部として,あるいは子供の遊び場や宗教儀礼の場としても利用されていた 写真 5 は,昭和30年代の花輪のコミセ内部の様子を示しているコミセ内ばかりでなく,上からも商品を吊して利用していることがわかる

花輪では,藩政時代から昭和 43 年まで,コミセ通りに沿って定期市が開かれていた 市(いち)の開催と連携して,山間地での人・物・情報の交流基地であったところに花輪のコミセの特徴がある 雪国にあってコミセは,防雪のみならず多くの機能を備えた装置であったと言えよう

④雪対策の転換

大正から昭和にかけての交通手段の変化と,昭和初頭から続いた凶作により,経済構造の変化による景気・失業対策や凶作対策として道路の舗装や拡幅の公共土木工事が進められ,コミセは撤去され始めた 特に高度成長期以降は車社会に対応するべく,道路拡幅が進められ,殆どのコミセが姿を消した それに伴い,市の開設場所も道路沿いから町の一角へと移されてしまった このことは,堆雪・排雪場所であった道路が機械除雪によって交通機能を確保するようになったことと,公共空間としての私有地が単なる私有地となったことで,かつては地域の全員が参加していた防災への関わりが失われ、交通という単一機能しかもたなくなったことを意味している

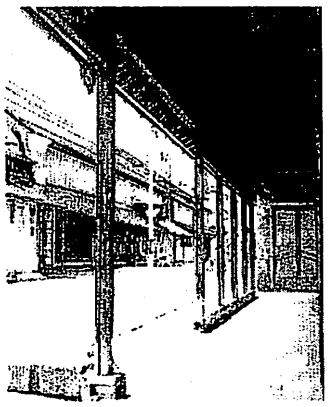

写真 4 道路の両側に向かい合わせに現存するコミセ



NII-Electronic Library Service

Institute of Social Safety Science

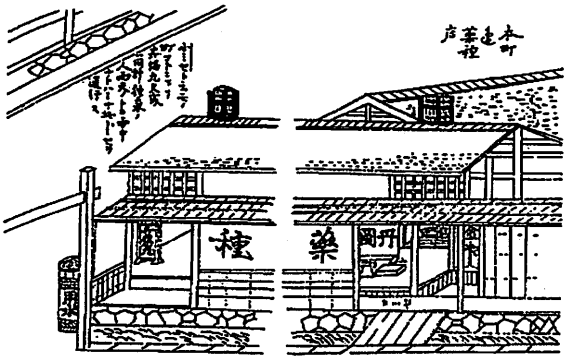


図 3 江戸時代(1788 年頃)の弘前市のコミセ
(文献 13)より引用)

写真 5 花輪のコミセ内部の様子
(文献 11)より引用)

コミセはガンギともよばれ,東北から北陸地方の雪国地帯で広く見られた木造アーケード街であった いずれの地域においても車社会の到来によってコミセは撤去されていったが,その中で花輪のコミセは雪対策という主機能は失ったものの,1970年代まで定期市が開催され,周辺地域の人や物・情報が交流する情報交換の場という機能は維持され続けた

## 4 現代の防災対策への教訓

秋田県の鹿角市花輪地区での町家調査から,この地の凶作・火災・洪水・積雪に対する伝統的な防災対策の事例を紹介した 以下に現代の防災対策にも活かすべき教訓を整理する

凶作対策では,住民に生活基盤の維持・再建に必要な地域資源の管理運営を任せることによって備蓄という一機能だけでなく,財産としても運用され,近隣町内の復旧にも役立っている また,生活を取り巻く環境の観察と分析による智恵の集積が,非常時に有効な地域資源を明らかにしていた このことから次の知見が得られた

① 地域住民による地域資源の共有管理と備蓄が有効なこと
② 非常時に有効な地域資源を把握しておくこと

火災対策では,建物による備えは藩政時代の影響によるものが見られた また,中心市街地を焼失した大火災の被害と教訓が語り継がれることによって,火災への注意が喚起されていた その伝承は,各家庭内ばかりでなく,祭りという地域行事にも組み込まれている 以上から,次のことが防災対策において重要と考えられる

③ 当該地域の歴史的文化的背景に則した対策を考えるべきこと
④ 地域の気候特性に配慮した建物構造で備えるべきこと
⑤ 家庭での生活防災教育が重要なこと
⑥ 啓蒙活動の継承・継続には祭りのような地域挙げてのイベントに組み込むことが有効なこと

洪水対策からは,凶作対策と同様に,地域住民による備蓄と管理が重要であることが指摘できる

雪対策では,コミセは雪国特有の町並みであるほか,情報交流基地として冬季以外にも重要な施設であったことから,以下のことが重要と考えられる

⑦ 防災対策に加えて、平常時にも利用可能な多機能な構築物が望ましいこと
⑧ 防災対策を生かしながら、地域の特徴ある街並み景観を形成すること

謝辞 貴重な建物を調査させていただいた関・小田嶋両家の方々や資料や情報を提供して下さった鹿角市の方々に御礼申し上げます また,共同調査に参加された東北工業大学・高橋恒夫教授と同大学建築学科建築史研究室の学生諸君,アトリエあすか代表・田中勝昭氏に謝意を表します

### 脚注

*鹿角市花輪には,広大な南部領を治めるために城下町に代わる機能をもつ在町が存在した その機能は次の4点に集約される ①蔵物・給人米の払市場,②領内外の流通拠点,③地域内の流通拠点=市の開催④交通の要所(伝馬)

**この日は「日露戦争の日本海海戦で勝利した日」と人々には記憶されている

***このかつての共同管理地にある神社は,現在も六日町の氏神として5月 19・20 日に祭典が行われている

### 参考文献

1) 鹿角市:鹿角市史 第 1-5 巻, 1982
2) 鹿角市:平成 11 年版鹿角市統計書
http //www city kazuno akita jp/toukei/toukei html
3) 鹿角市:鹿角市史 第 2 巻上, pp 285-289, 1987
4) 市川建夫:風の文化誌, p 47, 1982
5) 日本の食生活全集秋田編集委員会:日本の食生活全集 5 聞き書き秋田の食事, pp 340-344, pp 350-356, 1986
6) 秋田県:秋田の民家, p 47, 1982
7) 鹿角市:鹿角市史 第 4 巻, pp 294-297, 1986
8) 五十嵐典彦他:町家「松風邸」建築調査報告, pp 28-29, 1985
9) 鹿角市:鹿角市史 第 4 巻, pp 447, 1986
10) 鹿角市:鹿角市史 第 3 巻上, pp 321-322, 1993
11) 鹿角市:鹿角市史 第 4 巻, pp 66-67, 1986
12) 菅原邦夫他:近世における雁木通りの建設整備過程, 日本建築学会計画系論文集 第 494 号, pp 221-228, 1997
13) 谷川健一:日本庶民生活史料集成 第十巻 農山漁民生活, pp 221-228, 1980
14) 秋田県立大学木材高度加工研究所・東北工業大学建築学科建築史研究室 過去から未来へ 鹿角市花輪の「コミセ」を持つ町家の調査報告書~保存と再生へ向けて~, 74p , 2001



NII-Electronic Library Service